

(私家版) ヘルダー文献1945-2025

嶋田, 洋一郎
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 名誉教授

<https://doi.org/10.48708/7407630>

出版情報 : 2026-03-04. 九州大学
バージョン :
権利関係 :



解題（１）1945-1975

<1945~1955 年>

この時期は第二次世界大戦終結後の時期ということもあって、それまでの民族主義的なヘルダー像からの転換を模索する動きがいくつか見られる。終戦直後の 1945 年には Hugo Sommerhalder の研究書”Herder in Bückeburg als Deuter der Geschichte”が刊行されている。ヘルダーがビュッケブルクに着任したのは 1771 年のことであり、それから 1776 年にゲーテの尽力でヴァイマールに赴任するまでの五年間をビュッケブルクで過ごした。

ドイツの哲学者で教育学者ヘルマン・ノール(1879-1960)によって「ドイツ運動」と呼ばれた時期は、ヘルダーがビュッケブルクに着任する一年前の 1770 年にヘルダーがシュトラースブルクで若きゲーテと出会うことによって始まるシュトルム・ウント・ドラングという文学運動が出発点とされる。このドイツ的な文学運動は特に第三帝国期に称揚され、ヘルダーもその民族主義的な運動の指導者とされた。

そのシュトラースブルクに比べると啓蒙専制君主シャウムベルク・リッペ伯爵の治めるビュッケブルクは「啓蒙」というイメージもあり、民族主義的な視点で捉えられることも少なかったと思われる。ただ第三帝国期に称揚された著作、すなわちヘルダーの編纂した『ドイツの特性と芸術について』”Von Deutscher Art und Kunst”は、まさにこのビュッケブルク時代の 1773 年に刊行されている。

こうしたビュッケブルク時代のヘルダーを主題としようとする Sommerhalder の意図は、どこにあるのだろうか。同書の「序論」は次のように始まる。

「ヘルダーの作品はズプハン版で三十二巻にもなり、何冊かは本当に分厚い巻になっている。しかしながらその三十二巻に多くの書簡は含まれていない。私はこのズプハン版をいくつかの大きな図書館を通じて借り出した。だが私が何度か発見したのは、この版の個々の巻はすでに五十年以上もそれぞれの図書館に保管されていたにもかかわらず、どの巻もほとんど開かれていなかったということである。

ヘルダーと取組む者は、この発見に驚かないだろう。というのも、その者は次のことを知っているからである。すなわち、光が交錯し、不安定なヘルダーの世界、それも明瞭な輪郭と見通しのきく地形図を欠いた世界の中で、この人物をすべてにわたって追跡するためには、どれほどの忍耐と感受能力が必要とされるかということ。」（同書、7 頁）

「ズプハン版で三十二巻」というのは最後の第三十三巻が全体の索引となっていることによるが、いずれにしてもこの「序論」冒頭の文章で重要なのは次の二つの点であろう。

一つは、Sommerhalder がヘルダーの特定の作品からではなく、『ズプハン版ヘルダー全集』から書き起こしていることである。また「その三十二巻に多くの書簡は含まれていない」という文章が示すように、Sommerhalder は書簡も含むヘルダーの著述全体を視野に入れており、それは前の時代の偏ったヘルダー解釈を避けるということでもあったと思われる。ただそれに続く「どの巻もほとんど開かれていなかった」という文章からは、1877 年から始まった『ズプハン版全集』の最終巻の刊行が 1913 年であったにせよ、1945 年以前には全三十三巻に目を通すことは稀であったと想像される。

もう一つの重要な点は、Sommerhalder がヘルダーの作品世界を「明瞭な輪郭と見通しのきく地形図を欠いた世界」と表現していることである。こうした曖昧さと多義性こそがヘルダーの特徴であるが、逆に言えば、作品解釈の幅もそれだけ広がるということである。したがってヘルダー研究の最大の課題は、ヘルダーの著述全体を俯瞰することと、それによって特定の狭い視点からの恣意的な解釈を避けるということに尽きると言える。

しかしこれは「言うは易く行ふは難し」であり、結局は個々の研究者が、これらの点をふまえて、どのような観点からヘルダーと取組むのか、ということになろう。Sommerhalder は自らの研究書を三つの大きな章に分けて、最初の二章では『シェイクスピア』(1773)と『人間性形成のための歴史哲学異説』(1774)を中心として人間と歴史の関係について考察を行うが、120 頁ほどの同書の半分以上を占める(53-118 頁)第三章「罪と約束」(Schuld und Verheißung)では歴史と神の問題についてハーマンの宗教観と比較しながら「言葉としてのロゴス」を中心に考察を進める。

この時期にはまた Humanität を重視するヘルダー像への転換が見られる。そしてその Humanität を基本理念とする『人類歴史哲学考』が邦訳も含めて何点か出版されていることも一つの特徴であろう。1947 年には Heinz-Winfried Sabais 編の作品集”Johann Gottfried Herder. Briefe zur Beförderung der Humanität”が刊行されている。これは『フマニテート促進のための書簡集』(1793-97)から四十六篇ほどを抜粋したものであり、編者の Sabais は「序文」において次のような問いを投げかけている。

「我々にヘルダーは今日まだ何を言うことができるのか、我々に彼の思想や認識は何を与えることができるのか。それも、血で血を洗う残虐さとおよそ文化を失った状態へと、まったく信じられないくらいに逆戻りした後で、文化の促進力と最高の表現形式としてのフマニテートに再び思いを致すこの時に。われわれは苦勞しながら自らのフマニテートと

いう理想を新たに構築するにあたって、彼からどのような刺激を期待できるのか。」(同書、5頁)

同じく 1947 年にはイギリスのドイツ文学研究者 Alexander Gillies によって、ドイツ語テキスト版の『1769 年の旅日記』が出版されている。これはテキスト全体に加えて 40 頁ほどの「序論」と、同じく 40 頁ほどの注釈が収められたもので、研究用のテキストとして十分に使用に耐えるものである。

1948 年から 1949 年には日本で『人類歴史哲学考』の新しい完訳が『人間史論』という表題のもとに四分冊で刊行されるが、訳者によって第一分冊の巻頭に置かれた対談形式の長大な「解題」は次のように始まっている。

「A かう何もかも行き詰つてはやりきれません。この際僕の思想を根本的に改造したいとおもふんですが、どうでせう。

B 君たち若い人がさうおもふのももつともだ。日本の國がそのとおりです。いや、世界が何處も行き詰つてゐるぢやありませんか。然し思想を改造しようと發心したのはさすが新しい時代を背負ふ若い人たちだ。

A それで何かその助けとなるように、世界的な大著述を精讀したらとおもふんですが、カントの純粹理性批判なんかどうでせう。

B 純粹理性批判も結構だが、相當難解な哲學の専門書だからなあ。それになるほどコペルニクスの轉換といふけれど、それは學術のための轉換で、方法論の問題ですね。さういふ抽象的のものより、具體的な論述をお薦めしたい。君たち一般のインテリ青年には。

A さういふ具體的の論述でカントの本に對抗するものがあるのでしょうか。

B ありますとも。しかもそれは純粹理性批判の向ふを張って書かれたヘルダーの主著です。

A ヘルダーはカントの同時代人なんですか。あのゲーテの畏友のヘルダーですね。

B さうです。Johann Gottfried Herder です。ヘルダーがゐなければ、「ファウスト」も「ヴェルテル」も生れたかどうかとおもはれるくらゐ青年ゲーテに影響を與へたことは君たちも知ってゐるでせう。ヘルダーは一七四四年東プロシヤのモールンゲンといふ田舎町に生れたのだから、ゲーテより五つ年長で、カントよりは二十、年下だけれど、二十歳の時からケーニヒスベルクの大學でカントの講義を聴いたんです。その時のカントはコペルニクスの立場に立つ以前のカントでした。しかしヘルダーは二十三歳で文學評論の力作を發表するほど早熟の天才であるに對して、五十八歳で（日本風の年勘定ですよ）純粹理性

批判を發展した大器晩成の學者ですから、二十年の年齢の相違は無視してもよいくらいです。

A そうするとカントとヘルダーは師弟の関係があつたわけですね。それがどうして反對の立場に立つたのでせう。(・・・)

A それでヘルダーはその純粹理性批判の反駁としてその本を書いたのでせうか。その本は何といふ本なのですか。

B いや反駁として書いた本は別にあります。メタクリティクといふのですが、それはヘルダーの著作中では上等の部類とはいへません。僕のいふのは”Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit”のことです。直譯すれば「人間の歴史の哲學への幾多の着想」とでもいふところです。

A 歴史哲學の本ですか。

B 歴史哲學といふと、ヘーゲルや近いところでは新カント派のコーヘンなどを聯想するでせう。もちろんヘルダーのこの本が後世の歴史哲學を生んだとはいへるでせうが、本の性格がまったく違ひます。ヘーゲルでもコーヘンでも自分の哲學體系を持ってゐて、歴史に向ふので、その哲學體系は純理論的に出来たもので、それを歴史に當嵌めて考へ、抽象理論の骨に史實の肉を附けたやうなものです。ヘルダーにいはせるとさういふのはメタフィジク形而上学といふのです。そんな行き方なら、樂に同じ論題で著述できるのだが、ヘルダーは至難の道を選んだので、かういふ仕事は人間業で出来ない、少くとも數百數千年後の天才に俟たねばならんといつてゐるくらいです。

A といひますと、それはどういふことなのですか。一體何を書かうとしたのですか。

B 多少物を考える現代人なら、みな頭を悩ましてゐることを書いてゐるのです。早い話が、現代文明の頂點は原子爆弾でせう。原子爆弾の今迄の效力は大和魂を粉碎する程度ですが、今後文明が停頓しない限り、どんな物凄い效力を發揮するか判らない。敵國人を文字通り殲滅するかもしれない。この爆弾だけではない、どんな戦慄すべき武器が出来るか想像以上でせう。他方戦争の範圍が漸次擴張して行くことが國際情勢に歴然たるものがある。將來の戦争では中立國とか不参加國とかいふものは成立たないのではないか。世界人類が二つに分れて全地球を戦場として戦ふといふことも決して夢ではない。これを今いつた武器の無限の發達と思ひ合わせてみると、「人類は何處へ行く」「神は何處にゐるか」といひたくなる。(・・・)

A それではどうすればよいのでせう。

B ヘルダーは人力の及ぶ限りのことをしようと思立つたのです。(・・・) 人間の知識でこの問題に關係するかぎりのものを皆利用してゐるのです。(・・・) 第一部第二部の全體は一口にいへば人間性あるひは人道といつてもよろしい。近頃いふヒューマニティーで、ヒューマニズムの問題なのです。ヒューマニズムをこれほど根柢から徹底的に論じたものは他に類がないでせう。(・・・)」(同・訳書、9-15 頁)

敗戦国であるドイツと日本が戦後直後にヘルダーをどのように読もうとしたのかが読みとれる言述であるが、それから八十年を経た現在において、こうした言述が再び説得力を持つようになるとは、まったく予想もできなかったと言えるだろう。

さて、1948 年と 1950 年には「ヴィーコとヘルダー」に関する文献が二つ見られるが、このテーマはすでに 1931 年の E・アウエルバッハの講演に見られるもので(邦訳「ヴィーコとヘルダー」、高木昌史他訳『世界文学の文献学』(1998)に所収)、そこでの重要な主張の一つは「<民族精神>という決定的な言葉はヴィーコには出てこない」(同訳書、311 頁)、というものである。これはヘルダーについても同じことが言える(これについては、拙訳『人類歴史哲学考』(五)、287 頁を参照)。

1949 年には Wilhelm Dobbek による 210 頁ほどの研究書”J.G.Herder's Humanitätsidee als Ausdruck seines Weltbildes und seiner Persönlichkeit”がブラウンシュヴァイクにある Georg Westermann Verlag から出版されている。巻頭に「東プロイセンの友人たちに捧げる」(同書、3 頁)と書かれた同書は、同じく東プロイセンに生れたヘルダーを念頭に置きながら、戦後という時代の中で Humanität を中心とするヘルダー像を描こうとしているように思われる。考察対象となる作品の範囲も『ズプハン版全集』全体を対象としており、「ヘルダーの世界観」から記述を始め、「ヘルダーのフマニテート理念の展開」として宗教、政治、美の理想、教育などといった観点から記述を進めている。

同じく 1949 年には前出の Alexander Gillies によるヘルダーの伝記 ”Herder. Der Mensch und sein Werk”が刊行されるが、英語版の”Herder”は 1945 年に出版されている。ただ、ドイツ語版の「前書き」の日付は 1944 年となっており、それは「ヘルダーの生誕 200 周年に合わせて出版される」(同書、7 頁)と書かれている。大戦の末期から戦後の混乱期にあったこともあり、この間の事情は不明である。

200 頁を超える量の同書の記述には上述のような時代背景もあって、特に“Volk”という言葉には微妙な表現もありそうであるが、“Volkslieder”(1778-79)については「世界文学」

(Weltliteratur)という表現も見られ(同書、97 頁)、戦時期のドイツにおけるような偏狭な民族主義には陥っていないように見える。

この時期における最も重要な歴史上の出来事は、1949 年にドイツが東ドイツ(=ドイツ民主共和国)と西ドイツ(=ドイツ連邦共和国)に分裂したことであろう。これ以後ドイツにおけるヘルダー研究は東と西に分断された形で行われるが、特にこの戦後最初期において注目すべきは、東ドイツでのヘルダーに対する高い評価である。すなわちそれはヘルダーにおける重要概念である Humanität に加えて、Volk という言葉を「民族」から「人民」、あるいは「民主」へと読み替えることによってヘルダーに新たな国民的・民主的思想家としての役割を担わせることであったと言える。なかでも Wolfgang Harich による一連の業績は重要であり、これらは Harich 個人についての評価も含めて、今後あらためて検討する必要がある(東ドイツにおけるヘルダー研究については、Michael Maurer: “Wir handeln im Geiste Herders! Herder in der DDR. In: Herder-Jahrbuch. Bd.XII (2014), S.11-34.を参照)。

1951 年には日本の大学での授業用教材として星野慎一と熊田力雄が『人類歴史哲学考』(1784-91)の日本語注釈付きの抜粋版を第三書房から刊行している。作成者は未見であるが、この時期における日本におけるヘルダー受容を語る貴重な一冊である。

1952 年には K. E. Hoffmann 編の”Johannes von Müller. Briefwechsel mit Johann Gottfried Herder und Caroline v. Herder geb. Flachsland 1782-1808”が刊行される。この 350 頁に及ぶ往復書簡集は、1881 年に Jakob Baechtold によって刊行された手記”Aus dem Herder'schen Hause. Aufzeichnungen von Johannes Müller (1780-82)”の続編として構想されたもので、資料的な価値の高いものである(これについては前掲拙著『ヘルダー論集』第九章、440 頁を参照)。

同じく 1952 年には上述の Wolfgang Harich の編纂によって、シリーズ ”Klassische Erbe aus Philosophie und Geschichte”の一つとしてヘルダーの歴史哲学に関する二巻本の作品集 ”Zur Philosophie der Geschichte. Bd.1. Abhandlungen · Fragmente · Notizen (1764-1803)”および”Zur Philosophie der Geschichte. Bd. 2. Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit (1782-1791)”が刊行されている。

650 頁に及ぶ第一巻には、編者の Harich による長大な序論 ”Herder und die bürgerliche Geisteswissenschaft”(同書、7-82 頁)に続いて次の作品が収録されている。なお、作品名の表記は Harich によるドイツ語の表記に従う。

<リガ 1764-1769>

『哲学と民衆』(1764?)

『我々はまだ公衆をもっているか』(1765)

『趣味の変化について』(1766)

『種々の宗教について』(1766/67?)

『文学史試論』(1766/67)

『言語の年齢について』(1768)

『ヴィンケルマン。ギリシアとエジプトの芸術について』(1768)

『貨幣学の文化史的価値について』(1768)

『帝国史について。歴史的漫遊』

『諸国民と時代の趣味について』(1769)

<フランスへの船旅とシュトラースブルクでの滞在 1769-1771>

『フランスへの船旅の日記から』(1769)

『言語の起原について』(1770)

<ビュッケブルク 1771-1776>

『普遍史における授業の梗概』(1773)

『人間性形成のための歴史哲学異説』(1774)

『ドイツの司教はいかにして領邦等族となったか』(1774/75)

『人間の誕生について。一つのエピソード』(1775/76)

<ヴァイマール 1776-1803>

『歴史における統治と学問』(1779/80)

『人間の不死について』(1791/92)

『人間と国家の老化について』(1791/92)

『疑いと希望』(1799)

この二巻本に共通の表題は「歴史の哲学に関して」(“Zur Philosophie der Geschichte”)となっているが、上記の第一巻には実に多くの分野の作品が収められている。これに対して第二巻は660頁ほどの全体が『人類歴史哲学考』(1782-91)にあてられている。『人類歴史哲学考』をヘルダーの主著と見なすならば、第一巻に収められた諸作品は、ヘルダー自身によるその注釈と見なすこともできよう。これもまたヘルダーの作品全体を視野に入れた一つの見識であろう。

1952 年の東ドイツでは Wilhelm Dobbek による ”Herder. Ein Lesebuch für unsere Zeit” も刊行されている。これについては作成者・未見のため、1967 年の項において、作成者が実際に目にした同書の第九版に基づいて解説を加えたい。

1953 年には西ドイツのハンザー出版社から Karl-Gustav Gerold による二巻本の作品集が刊行されている。収録されている作品は次のとおりである。

第一巻

<詩作品>

エピグラム

『民謡集』(1778-79)(抜粋)

『シッド』

<1765 年から 1773 年の散文作品>

『近代ドイツ文学についての断想集』(1766-67)(抜粋)

『1769 年の旅日記』

『彫塑』(1778)

『言語起源論』(1772)

『ドイツの特性と芸術について』(1773)

第二巻

<歴史哲学作品>

『人間性形成のための歴史哲学』(1774)

『人類歴史哲学考』(1784-91)(抜粋)

<ヴァイマル期の著作から>

『人間の生来の嘘について』(1777)

『人間の魂の認識と感受について』(1778)

『魂の変転について』

『ティトンとアウローラ』(1792)

『フマニテート促進のための書簡集』(1793-97)(抜粋)

<聖職者と教育者の言葉>五編

ヘルダーの伝記的側面の研究について見れば、1954 年にルドルフ・ハイムの『ヘルダー伝』が Harich によって 100 頁を超える長大な序文を付して再刊されたことは、後述する『ズプハン版ヘルダー全集』の再刊とともに第二次世界大戦後のヘルダー研究にとって、

いわばその土台となるものであった(ハイムとズプハンについては前掲拙著、第一章「ヘルダー研究の諸問題」を参照。なお、この序文は1958年の再版においては削除されている)。Harich はハイムの『ヘルダー伝』について、前出の序文に基づいた200頁ほどの研究書“Rudolf Haym und sein Herderbuch”を1955年に出版しており、この時期の東ドイツにおけるヘルダー研究はまさに「ドイツ民主共和国」が国を挙げてヘルダー研究を促進しているかのような印象を与える。

またこの時期の東ドイツでは1955年にヘルダー晩年のカント批判の書である『純粹理性批判の超批判』(1799年)と『カリゴネー』(1800年)のテキスト版も出版されている。これらはHarichの論考“Ein Kantmotiv im philosophischen Denken Herders”(Harich: “Rudolf Haym und sein Herderbuch”に所収)や、Littの“Kant und Herder”(1949)と共にカントとヘルダーの関係と両者の受容史を考察するうえでも不可欠のものである。それは「はじめに」で見たように、ヘルダー最初期の『存在に関する試論』(1763)から晩年の『カリゴネー』(1800)に至るまでのカントとヘルダーの関係を全体的に再検証しようとする近年の動向との関連においても重要性を失っていないと思われる。

同じく1955年の東ドイツではHeinz StolpeによるA5判で500頁を超える大著“Die Auffassung des Jungen Herder vom Mittelalter. Ein Beitrag zur Geschichte der Aufklärung”が刊行されている。「序論」によれば、Stolpeがこの仕事に着手したのは、ドイツ民主共和国憲法が採択された1949年の5月に遡る(同書、16頁)。すなわちヘルダー研究者としてのStolpeの経歴は東ドイツの誕生とともに始まる。それゆえStolpeの研究には東ドイツの文学研究に想像されがちな教条主義的色彩が濃いのではと考えられるが、全体としては『ズプハン版全集』や種々の書簡集など、ヘルダー自身のテキストに即して『人間性形成のための歴史哲学異説』を中心に実証的な論述が心がけられている。

上述のHarichやStolpeに象徴される東ドイツにくらべると、同時期の西ドイツにおけるヘルダー研究は点数も少なく、前述のGerold編の二巻本の作品集(1953)以外には目立った業績はないように思われる。その背景としては、第三帝国時代の偏狭な「民族精神」の代表者としてのヘルダー像を払拭できるだけの理論武装や卓越した研究が、西ドイツで生れなかったことが考えられる。ただ、そうした中でも「マールブルク東方研究叢書」の一冊として「ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー研究協議会」(Johann Gottfried Herder-Forschungsrat)によって、ヘルダー没後150年にあたる1953年に刊行された論文集『ヘル

ダーの精神において』"Im Geiste Herders"は、戦前の 1916 年から戦後の 1953 年にかけて刊行されたヘルダー文献を記載している点で書誌的に注目に値する。

ちなみに 1916 年という年は、それ以前のヘルダー文献を記載したゲーデケによる『ドイツ文学史綱要』第 4 巻の改訂第 3 版が刊行された年であり、今回の論文集『ヘルダーの精神において』における書誌はこれを引き継いだものである（これについては前掲拙著、第九章「新たなヘルダー研究に向けて」、430 頁を参照）。

同・論文集に収録された J. C. Probst の論考「アルゼンチンにおけるヘルダー」は同地での政治状況との関連において 19 世紀以降のヘルダー受容について考察している。この論考はまた 1948 年にブエノスアイレス大学から刊行されたスペイン語による論文集(「年表：ヘルダー文献 1945-2025」参照)を理解するためにも非常に有益である。

また英語の文献では 1952 年に J. F. Harrison によって "J.G. Herder: "Journal of my Travels in the Year 1769", Translated, with Introduction and Notes" が書かれている。片面印刷ではあるが 400 頁を超えるこの学位論文は、英語による最初の全訳であることに加えて、200 頁にわたる解説が付されており、英米圏におけるヘルダー研究に立派な足跡を残している。

同じく英語の文献では 1955 年に刊行された Robert T. Clark, Jr. による "Herder. His Life and Thought" が重要である。この A5 判で 500 頁に達する大著はヘルダーの伝記としてはハイムの二巻本に次ぐ分量である。「前書き」によれば 1930 年からヘルダー研究を始めた Clark は 1942 年から第二次世界大戦を挟んで 1951 年までの間にこの浩瀚な伝記を完成させている(同書、v 頁)。また Clark はドイツ語のみならず英語のヘルダー文献にも十分に目を通しており、英語による先行研究としては特に Alexander Gillies による一連の業績を高く評価している。ヘルダーの伝記という点での Clark の最大の関心は、ハイムやキューネマンに見られるカント寄りの姿勢を再検証することにある(同書、2-4 頁)。なお、同書は 1969 年に第二版が刊行されている。

<1956~1965 年>

この時期も東ドイツでの出版が目につくが、なかでも Wilhelm Dobbek による業績には顕著なものがある。Dobbek は作品集や伝記などと並んで特にヘルダーの書簡集の編纂や出版に大きく貢献しており、しかもそれは戦前から Hans Schauer らによってヴァイマルにおいて構想されていたヘルダーの「書簡全集」の実現を目ざすものであった（これについては前掲拙著、第九章「新たなヘルダー研究に向けて」、436 頁以下を参照）。

1957年にはDobbek編の五巻本の作品集が刊行されている。戦後に刊行された作品集としては後述の『ハンザー版作品集』(1984-2002)と『フランクフルト版作品集』(1985-2000)以前では最も分量のあるものであった。第一巻の巻頭にはDobbekによる50頁ほどの全巻への「序論」が置かれ、各巻には注釈も付されている。収録されている作品は次のとおりである。

第一巻

『自己対話』(Selbstgespräch)など詩作品十六篇

『黒人の牧歌』(Negeridyllen)

『救い』(Die Rettung)

『ドイツの国民的賞賛』(Der deutsche Nationalruhm. Eine Epistel)

『ゲルマーニエン』(Germanien)

『エピグラム』(Epigramme)二十二編

『解毒剤』(Das Gegengift)

『蟻』(Die Ameise)

『聖ヨハネス』(Sankt Johannes)

『地上』(Die Erde)

『自我』(Das Ich)Ein Fragment

『自己』(Selbst) Ein Fragment

“Ademetus Haus”へのエピローグ

『ためらうな!』(Zage nicht!)

『太陽』(Die Sonne)

『パラミューティエン』から。ギリシアの寓話からの詩作品。四篇

(Aus den Paramuthien. Dichtungen aus der griechischen Fabel)

『東方の文学からの翻案』三篇

(Nachdichtungen aus der morgenländischen Literatur)

『愛の歌』『ソロモンの雅歌』から六篇

『1769年の旅日記』

『シッド』

第二巻

『近代ドイツ文学についての断想集』(1767-68)(抜粋)

『言語起源論』(1772)

『シェイクスピア』(1773)

『中世英独詩芸術の類似性、並びにそこから生じる諸問題について』(1777)

『民謡集』第二部(1779)「序言」から

『人間性形成のための歴史哲学』(1774)

第三卷

『人間の魂の認識と感受について』(1778)

『彫塑』(1778)

『趣味が栄えた諸民族にあって趣味が衰亡した原因』

『古代と近代における諸民族の習俗に及ぼした文学の影響について』(1778)

『学問に及ぼす統治の影響と、統治に及ぼす学問の影響について』(1779)

『ドイツの普遍精神のための最初の愛国的機関への理念』(1787)

第四卷

『人類歴史哲学考』(1784-91)(抜粋)

第五卷

『神。いくつかの対話』(1787)

『魂の変転について』

『フマニテート促進のための書簡集』(1793-97)(抜粋)

「肖像画」

ルター、フッテン、ヴィンケルマン、レッシング、カント、フランクリン

『学校講演』(Schulreden)十五編

「宗教は大衆の阿片」(マルクスとされる) 東ドイツでは無理のないことかもしれないが、神学に関する作品が入っていない点を除けば、この五巻本では非常に調和の取れた作品の選択が行われていると思われる。

この 1957 年には同じく Dobbek 編の“August von Einsiedel. Ideen”も出版されている。ヴァイマールでゲーテやヘルダーとも親交のあった哲学者で自然探究者 August von Einsiedel (1754-1837)は、青年期にゲッティンゲン大学で数学者 Abraham Kästner や自然科学者 Christian Wilhelm Büttner らのもとので学んだ。特にヘルダーには親近性を感じ、ヘル

ダー宛の書簡を多く残している。哲学に関する Einsiedel の思想や省察は二冊のノートにまとめられ、その写しがヘルダーの「手書き遺稿」の中に残されている。

それらは”Ideen”と呼ばれ、1776(?) -80 と 1791-97 の二つの時期のものに分けられており、今回の Dobbek による書物は、それらをヘルダーの「手書き遺稿」から復刻し、詳細な解説と注を付したものである。280 頁近くの同書は、“Leben und Schriften Einsiedels”と題された「序論」(同書、5-58 頁)、“Die >Ideen< von 1776(?) -80”(同書、59-110 頁)、“Die >Ideen< von 1791-97”(同書、111-228 頁)、“Anhang”(同書、229-240 頁)、“Die Verteilung der >Ideen< auf die Jahre ihrer Entstehung”(同書、241-246 頁) “Anmerkungen und Verzeichnis des Schrifttums”(同書、247-265 頁)、そして「索引」などから成っている。

>Ideen<という表題から読者は当然ながらヘルダーの『人類歴史哲学考』”Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit”(1784-91)との関連に興味をひかれるが、引用文と地の文の境界が非常に曖昧なヘルダー独自の記述方法もあり、その間の事情も複雑である。ただ、いずれにしてもヘルダーの『人類歴史哲学考』との緊密な関係が想像される一次資料が翻刻され、しかも詳細な解説と注が付されて出版されたことは、ヘルダー研究に大きく寄与することは明らかである。これも Dobbek の傑出した業績の一つである。

ヘルダーの書簡については 1959 年に Stapf によって編纂されたジャン・パウルとの往復書簡”Jean Paul und Herder. Der Briefwechsel Jean Pauls und Karoline Richters mit Herder und der Herderschen Familie in den Jahren 1785 und 1804”の刊行も重要である。というのも、2016 年に全 18 巻をもって完結した『ヘルダー書簡全集』はヘルダー自身が差出人となった書簡が中心であり、ヘルダー宛の書簡はほとんど収録されていないからである。それゆえ十八世紀にあつて思想交流の重要な媒体であつた書簡の全集は、差出人と受取人の相互の書簡が往復書簡という形で存在して初めて十全に機能すると言えよう。

その意味ではすでに 1952 年に K. E. Hoffmann によって編纂・刊行されていた『ヨハネス・フォン・ミュラー。ヨハン・ゴットフリートおよびカロリーネ・フォン・ヘルダーとの往復書簡。1782-1808』も重要である。また若きヘルダーに大きな影響を与えたハーマンと、1780 年代のスピノザ論争において多くの書簡を交したヤコービについては、それぞれ戦後に書簡集が刊行されており、ヘルダー宛の書簡も、そこで確認することができる。

ヘルダーの主著『人類歴史哲学考』についてもこの時期に大きな動きが見られる。まず 1959 年には J. R. Armengol によってスペイン語の全訳が刊行される。続いて 1962 年に M. Rouché によってフランス語訳(抜粋)が、また 1965 年には Heinz Stolpe による『人類歴史

哲学考』のドイツ語テキストが二巻本で刊行されている。これは作品全体に詳細な訳注が付された最初のドイツ語テキストであり、今もなお参照に値するものである。実際また、ヘルダーの作品はどれもそれが書かれた当時の思想との批判的な応答の性格が強いため、その思想史上の文脈が分らないと、ヘルダーの執筆意図そのものも十分に理解されないことになる。またヘルダーの文章自体も多く of 修辭に満ちており、さまざまな読まれ方を許すところがある。これはヘルダーの作品が翻譯で出版されようと、あるいはドイツ語の原テキストのまま刊行されようと同じである。

ちなみに全四部から成る『人類歴史哲学考』は『フランクフルト版作品集』のドイツ語原文だけでも 900 頁近くあり、それをすべて外国語に翻譯することは、たとえヨーロッパ系の言語であっても大変に骨の折れる作業であることは容易に想像がつく。それでもこのヘルダーの大著は広範囲に及ぶ内容と「フマニテート」に象徴されるヘルダーの全人類的思想ならびにメッセージのためもあるから早くから全訳が刊行されており、『ヘルダー文献目録』によれば、第二次世界大戦前にも五種類の全訳が存在する。

まず 1800 年には T. Churcill によって *Outlines of a Philosophy of the History of Man* として英語に翻譯され、これは早くも 1803 年に二巻本の再版が出ている(後者は作成者・未見)、そして 1827 年から 1828 年にかけて全三巻で E. Quinet によって *Idées sur la Philosophie de l'Histoire de l'Humanité* としてフランス語に全訳されている。また 1838 年には H. J. Bychowiec によって *Pomysly do Filozofii Dziejów Rodzaju Ludzkiego przez Herdera* としてポーランド語に全訳されている(作成者・未見)。フランス語による二番目の全訳としては 1861 年から 1862 年にかけて É. Tandel によって *Philosophie de l'Histoire de l'Humanité* として刊行されている。そして 20 世紀に入ると 1923 年と 1925 年に田中萃一郎と川合貞一の手でヘルデル『歴史哲学』として日本語初の全訳が刊行されている。

『人類歴史哲学考』を、特にその受容との関連で語る場合には、その第一部と第二部に対するカントの書評を無視することはできない。というのも、かつての恩師によるこれらの書評こそが、その後のドイツ哲学史におけるヘルダーの敗退を決定づけることになったからである。1959 年に刊行された Oscar Fambach による “Der Aufstieg zur Klassik in der Kritik der Zeit. Die wesentlichen und die umstrittenen Rezensionen aus der periodischen Literatur von 1750-bis 1795, begleitet von den Stimmen der Umwelt . In Einzeldarstellungen” は、その長大な表題が示すように、激しい論争を惹き起こした書評に加えて、批判された当事者の書簡などの一次資料を一括して掲載したものである。

1785 年に最初に発表されたカントの書評をはじめとする一連の関係資料は、同書の 357 頁から 397 頁に収録されている。カント書評との取組みは、ヘルダーの再評価という点において、近年のヘルダー研究にとっての最大の問題であり、同書に収められた資料は、この問題と取組むために不可欠な一次資料である。ちなみにその前の 310 頁から 356 頁にはカントの『純粹理性批判』(1781)に対する書評とその関連資料が収録されており、こちらでのカントは、批判される側に立たされている。

ヘルダーの受容史という観点からは 1959 年に刊行された G. A. Wells による英語文献 “Herder and After” が注目に値する。内容的にはヘルダーの作品を広く扱うというよりも、『人類歴史哲学考』の受容を中心に考察が行われている。すなわちカントによる書評から始まり、ショーペンハウアーやディルタイなどの 19 世紀ドイツの哲学者たちに至るまでのドイツのみならず、イギリスとフランスにおける受容(同書、233-261 頁)にも目が向けられている。特に興味深いのは、前述の『人類歴史哲学考』の英語およびフランス語の全訳においても、ヘルダーは十分に理解されていなかった(同書、261 頁)、という指摘であろう。

ヘルダー文献学との関連で重要なのは Wiora 編『ヘルダー研究』”Herder-Studien”(1960)と Irmscher による『カント講義録』(1964)である。前者は「マールブルク東方研究叢書」の一冊として前述の論文集『ヘルダーの精神において』(1953)と同じく「ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー研究協議会」によって刊行された論文集であり、先の論文集を受ける形で 1953 年から 1957 年にかけて刊行されたヘルダー文献を記載している。そして新たに編集協力者として Irmscher が名を連ねているが、ヘルダーの「手書き遺稿」との取組みをはじめとして、この時期における Irmscher の活動には顕著なものがある。

Irmscher はまず『ヘルダー研究』において「ヘルダーの手書き遺稿とその新たな分類」と「ヘルダーの遺稿におけるハーマンの原稿」という二本の論考を発表し、また『カント研究』の別巻という形で前述の『カント講義録』を刊行している。ちなみにこの講義録は「(私家版) ヘルダー文献 1945-2025」の「はじめに」で言及した最新の『アカデミー版カント全集』に収録が予定されている「カントの形而上学講義」の基礎資料の一つになっている。これらに加えて Irmscher は種々の専門誌にヘルダー文献学に関する以下の論考を次々に発表している。

1 : Ein wiedergefundenes Blatt J.G.Hamanns. In: Jahrbuch der dt. Schillergesellschaft, Jg.4 (1960), S. 225-8.

2: Johann Georg Müller und die erste Gesamtausgabe von Johann Gottfried von Herders Werken. In: Schaffhauser Beiträge zur vater-ländischen Geschichte 37 (1960), S. 98-131.

3: Herderiana im Nachlaß von Johann Georg Müller. In: Schaffhauser Beiträge zur vater-ländischen Geschichte 37 (1960), S. 221-6.

4: Aus Herders Nachlaß. In: Euphorion. Zeitschrift für Literaturgeschichte, Bd. 54 (1960), S.281-94.

5: Probleme der Herder-Forschung. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literatur- und Geistesgeschichte, Jg.37, Heft 2 (1963), S.266-317.

また<1956~1965 年>の項の冒頭で言及された Dobbek も Irmscher に決して劣らない活動を示しており、上述の『ヘルダー研究』には次の三本の論考と報告が掲載されている。

1: Die coincidentia oppositorum als Prinzip der Weltdeutung bei J.G. Herder wie in seiner Zeit.

2: Nachruf auf Hans Schauer.

3: Eine neue Ausgabe von Herders Briefen.

これらのうち 1 は、ニコラウス・クザーヌスの「反対の一致」という思想との関連からヘルダーの世界観を知るうえで重要な論考であり、2 と 3 はいずれもヘルダーの「書簡全集」に関わるものである。2 で追悼文を捧げられている Hans Schauer は、ヘルダーの「書簡全集」を戦前の 1919 年から構想していたが、1957 年に亡くなり、その仕事を引き継いだのが Dobbek であり、後の Günter Arnold であった。

このように Irmscher と Dobbek の複数の論考を収めた『ヘルダー研究』は、130 頁ほどの小著ながら、ヘルダーの「手書き遺稿」、「書簡全集」、そして「書誌」というふうに、それ以後の東西両ドイツにおけるヘルダー研究の礎石となったのみならず、特にこの時期の Irmscher による多くの論考はヘルダー文献学の傑出した成果となっている。

1960 年には Erich Heintel 編の "Joh. Gottfr. Herder's Sprachphilosophie. Ausgewählte Schriften" が「哲学文庫」(Philosophische Bibliothek)の一冊として刊行される。ヘルダーの言語哲学といえば『言語起源論』(1772)のみを想起しがちであるが、言語に関する思索は初期の『近代ドイツ文学についての断想集』(1766-67)から晩年の『純粹理性批判の超批判』(1799)にまで及んでおり、さらに近年では、先に紹介したヘルダー最初期の論考『存在に関する試論』(1763)の中にその萌芽が見出されている。

ヘルダーにとって言語とは、カントにとっての理性と同じように思考の根幹を成すものであり、さらにハーマンの影響もあって、言語と理性がロゴスという形で一体化したものとして存在している。この言語論選集には、Heintel による 40 頁に及ぶ序論「ヘルダーと言語」と、ヘルダーの言語思想を知るために不可欠と思われる次の作品が収録されている。

『言語起源論』(1772)

『近代ドイツ文学についての断想集』(1766-7)からの抜粋

『人類歴史哲学考』(1784, 1785)からの抜粋

『純粹理性批判の超批判』(1799)からの抜粋

ヘルダー思想の根幹である言語に関する著作が学術的な解説を付した形で読めるようになったことの意義は、ヘルダー研究にとって非常に大きなものであると言えよう。なお、1964 年には増補第二版が刊行され、次の三つの作品からの抜粋が新たに収録された。

『人類最古の文書』(1774)

『新約聖書の解説』(1775)

『人間の魂の認識と感受について』(1778)

1961 年に前述の「マールブルク東方研究叢書」の一冊として刊行された Dobbek の“J.G.Herders Jugendzeit in Mohrunen und Königsberg 1744-1764”は、ヘルダーの生誕地モールンゲンでの幼少年期と、進学先のケーニヒスベルクでの青年期を知るための不可欠の文献である。特にモールンゲンでの幼少年期の記述は、ケーニヒスベルクでカントに出会う以前のヘルダーが、自らの思想をどのようにして形成していったのかを明らかにするうえでも非常に重要であると思われる。そしてそれはこの東プロイセン地域に生れた著者 Dobbek のヘルダー研究者としての出発とも関連しているだけに、いっそう興味深いものと言える。このあたりの事情について Dobbek は同書の「緒言」において次のように書いている。

「この書物にも歴史がある。プロイセンのケーニヒスベルクにあるアルベルトゥス大学の促しにより著者は以前に＜J.G.ヘルダーの人間性と作品についての意義におけるモールンゲンでの幼少年期＞に関する本を書いた。この本はヘルダーの生誕 200 年にあたる 1944 年 8 月 25 日に出版されることになっていた。しかし当時この出版は許可されなかった。それでも同書からの一章は大学の「研究サークル」が自己責任で同じ表題のもとに印刷させてくれたが、それもヘルダーの誕生日から三日後にケーニヒスベルクの街を破壊したイ

ギリスの爆撃のほとんど完全な犠牲となった。ごく僅かな部数が難を免れたが、それらもまた戦争の間に消失してしまった。

それで著者は、自らの生涯の一つの大きな部分をケーニヒスベルクで、そして何よりもヘルダーの生誕の地であるプロイセン東部の小さなモールンゲンで過ごし、そして戦争が終わると、後年のヘルダーの活動の地であるヴァイマルに避難して安住の地を見出したのを契機に、かつて消失したものを、その土地についての自らの知識に基づいて、そしてまた J.G.ヘルダーの生涯と人間と作品についての自らの知識に基づいて新たに書き直し、それによってヘルダーの注目に値し、また重要な幼少年期に少しでも光をあてようと決心した。

必要な資料を調達するのには骨が折れた。以前すでに印刷された資料の大部分でさえが失われていた。だからこそグライフスヴァルトの大学教授 Günther Jacoby 氏が、失われたケーニヒスベルクの書類の写しとその推敲されたものを献身的に提供してくれたことに対して私は大きな感謝を述べたい。同じくテュービンゲンの Dr. H.D.Irmscher 氏は、同地に保管されている手書き遺稿の利用を勧めてくれ、同地の大学図書館は手書き遺稿の利用の手助けをしてくれた。またマールブルクの J.G.ヘルダー研究所とヴァイマルの州立図書館は消息不明の多くの文献を調達してくれた。ともに大きな感謝を述べたい。」

(同書、VII 頁)

この長い「緒言」には第二次世界大戦を挟んでのヘルダー研究の歴史が語られている。まず Günther Jacoby は戦前を代表するヘルダー研究者の一人で、“Herders und Kants Ästhetik”(1907)と、500 頁に及ぶ“Herder als Faust”(1911)という研究書がある。後者ではヘルダーの作品の典拠として『ズプハン版全集』のほかにも「手書き遺稿」が利用されている(同書、85 頁等)。Irmscher については前述の“Herder-Studien”(1960)の項で述べたとおりである。

1962 年には日本の大学での授業用教材として七字慶紀が『言語起源論』(1772)の日本語注釈(35-48 頁)付きの抜粋版を三修社から刊行している。50 頁ほどの小著であるが、前述の『人類史大観』(1951)とともに、日本におけるヘルダー受容を語る貴重な一冊である。なお 1969 年には第二版も出ている。

1963 年には前述の Dobbek による“Karoline Herder. Ein Frauenleben in Klassischer Zeit”が刊行されている。1770 年にダルムシュタットでヘルダーと知り合い、1773 年にゲーテの立会いのもとにヘルダーと結婚したカロリーネ(Karoline Flachsland, 1750-1809)は、恋

人、妻、母親、ヘルダーの回想録の著者として文字どおり波乱に満ちた生涯を送り、さらにはヘルダー最初の作品全集である『コッタ版全集』の編纂にも関わった。それゆえカロリーネは、彼女のいないヘルダーの生涯と作品がまったく考えられないくらい重要な存在であり、その意味でも Dobbek の同書はヘルダー研究にとっても必須の文献である。

Dobbek が執筆の典拠としているのは大部分がカロリーネの書簡と、彼女に関する書簡であるが、特に結婚前の 1771 年から 1773 年にかけてカロリーネがヘルダーと交した往復書簡は、『ヘルダー書簡全集』(1977-2016)の基礎を築いた Hans Schauer による校注を経て 1926 年と 1928 年に二巻本で出版されている(これについては前掲拙著、第九章<書簡集>の項を参照)。ここでもまた第二次世界大戦を挟んでのヘルダー研究の歴史が垣間見られる。

1965 年には西ドイツで Gerhart Schmidt による『人類歴史哲学考』のテキスト完全版が刊行される。ただこれには詳しい解説も注釈も付されておらず、一般の読者や研究者の手には届きやすくなったかもしれないが、研究の底本とするには不十分なものであり、その意味では同じ年に東ドイツで刊行された前述の Heinz Stolpe による『人類歴史哲学考』の二巻本の方が文献的な価値は高いと言える。

同じ 1965 年に刊行された F.M.Barnard による英語文献“Herder's Social & Political Thought”は英米圏のヘルダー研究にとって大きな意義を有するものであった。「啓蒙主義からナショナリズムへ」という副題からも見てとれるように第二次世界大戦後のヘルダー研究における重要なテーマの一つは、カントやゲーテを生んだドイツが、なぜ第三帝国への道を辿ったのかというアドルノ的な問題である。ただ、この問題提起は、特に終戦からしばらくの間は、ドイツからというよりも、むしろ英語圏から行われているように見える。なお前年の 1964 年に刊行されたドイツ語版はこの英語版の初期稿のドイツ語訳であり、英語版はその増補改訂版であるとされる。

<1966~1975 年>

刊行点数から見ると以前の各 10 年間からほぼ倍増しており、特に西ドイツと日本では戦後の高度経済成長という時代背景もあり、ヘルダー研究にも勢いが見られる。まず 1966 年には Irmischer が、1972 年に刊行 200 年を迎える『言語起源論』(1772)のテキスト版を刊行している。ちなみにこれは岩波文庫が模範とした「レクラム文庫」として刊行された

ものであるが、これ以降もヘルダーの作品は以下のように続々と「レクラム文庫」に収められ、今日に至っている。

1966: Abhandlung über den Ursprung der Sprache. (Hg. v. H. D. Irmischer)

1968: Herder · Goethe · Frisi · Möser. Von Deutscher Art und Kunst. (Hg. v. H. D. Irmischer)

1969: Von der Urpoesie der Völker. (Hg. v. K. Nussbächer)

1975: 》 Stimmen der Völker in Liedern 《 Volkslieder. (Hg. v. H. Rölleke)

1976: Journal meiner Reise im Jahr 1769. (Hg. v. K. Mommsen)

1990: Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit.

(Hg. v. H. D. Irmischer)

2001: Abhandlung über den Ursprung der Sprache (bibliogr. erg. Ausgabe)

(Hg. v. H. D. Irmischer)

2014: Herder · Goethe · Frisi · Möser. Von Deutscher Art und Kunst (Hg. v. H. Korte)

この Irmischer による『言語起源論』のテキストには 40 頁に及ぶ解説が付されているが、先の Stolpe による "Ideen" のテキスト版についても述べたように、多くの修辞に満ちたヘルダーの文章を当時の思想史的な文脈に置き戻して理解するためにも、相当量の解説、もしくは注釈が不可欠である。その意味でも 1968 年に同じく Irmischer によって「レクラム文庫」として刊行された『ドイツの特性と芸術について』(1773)は、ヘルダーのシュトルム・ウント・ドラング期を代表するこの作品が、戦前の 1935 年に Heinz Kindermann によって 50 頁もの解説を付して刊行された時には、ややもすれば民族主義的な読まれ方をされる恐れがあったのに対して、今回は"deutsch"というキーワードにその語源にまで遡って説得力のある解釈を施している点において今なお必読の文献である。

60 頁近い解説の中で最も重要と思われるのは、"deutsch"という語の多義性に言及した箇所であろう(同書、165-166 頁)。そこでは"deutsch"という語の持つ三つの意味について説明される。まず、この語が"theodiscus"という形で 786 年に、すなわちカール大帝の時代に、当時の公的な言語であるラテン語に対して「民衆的な」言語との関連で使用される。次に、この"theodiscus"を話す諸族がゲルマン人であったために、「ゲルマン的な」という意味が加わり、これはさらに古代ローマと結びついた「ロマン的な」という意味と対置される。そして第三に、この「ロマン的な」ものが 18 世紀後半のドイツにおいては特にフラ

ンスの文化や文学として現れてきたことから、“deutsch”はこれに対抗すべく「ドイツ人の」とか「ドイツ語の」といった、より狭い国民的あるいは民族的な意味を獲得する。

また Irmischer はこの解説においてヘルダーの主著『人類歴史哲学考』第四部第十六巻における“Deutsche Völker”という表現に注釈を加えている(同書、166 頁)。そこでは世界史上、「ゲルマン民族の大移動」と呼ばれる出来事について語られており、その場合の“deutsch”は「ドイツ人」よりも、むしろ広い意味での「ゲルマン人」との関連で理解されるべきであろう。ヘルダーに特有のこうした「語の多義性」は、ヘルダーの作品を翻訳するとき大きな問題となる(この“Deutsche Völker”の訳語の選択については、拙訳『人類歴史哲学考』(四)、382 頁以下を参照)。

1967 年には Dobbek が編纂した“Herder. Ein Lesebuch für unsere Zeit”の第九版が刊行されている(初版は 1952 年)。同書は、370 頁に及ぶ作品選集であり、「年譜」(XI-XX 頁)、「序論」(XXI-LVI 頁)、「ヘルダーの生涯に関する証言」(1-63 頁)、「作品の抜粋」(65-357 頁)、そして「人名索引と図版および文献表」(359-371 頁)から成っている。

まず「年譜」で注目されるのは、記述がヘルダーの誕生(1774 年)からではなく、両親 Gottfried Herder と Anna Elisabeth Peltz が結婚した 1738 年の記述から始まっていることであろう。単純化すれば一頁でも収まる年譜が十頁にわたっているのは、1763 年に父親が、また 1772 年には母親が亡くなったこと、そしてカロリーネとの結婚(1773 年)を経て、長男 Gottfried の誕生(1774 年)、次男 August の誕生(1776 年)、三男 Wilhelm の誕生(1778 年)、四男 Albert の誕生(1779 年)、長女 Luise の誕生(1781 年)、五男 Emil の誕生(1783 年)、六男 Alfred の誕生(1788 年)、七男 Rinaldo の誕生(1790 年)、そしてヘルダーの死(1803)に至るまで、時代の文化的・政治的状況なども含めて詳細に記述されているからである。また印刷の面でも、ヘルダーの伝記に関する事項は赤字で、それ以外は黒字で印刷されており、視覚的にも配慮されている。

「序論」は二十頁が生涯に、十五頁が作品に割り当てられており、これで「生涯と作品」が記述される。興味深いのは「作品」に関する記述における Dobbek の次の文章である。

「ヘルダーの思想は彼のいくつもの書物において、まさに分散した形で、個々の着想、それも常に内的に堅固に関連するとは限らない着想の並列として現れることが稀でない。本書のような小さな選集は、こうした印象をいっそう強固なものにする。それゆえ序論に必要なのは、彼の思想世界を単一のまとまったものとして把握し、叙述することである。」(同書、XLII 頁)

これはまさにヘルダーの著作の特性を知り尽くした Dobbek ならではの発言であろう。逆に言えば、ヘルダーの思想世界を理解するためには、たとえば「言語」については、「言語」という言葉を表題にした『言語起源論』(1772)だけではなく、「手書き遺稿」や「書簡」、さらには「抜粋」や「構想」も含めて、ヘルダーが文字にしたすべての文書を読む必要があるということである。

また同書の最後に付された「文献表」にも目を向けなければならない。なぜなら、そこにはヘルダーの作品を引用する際の基本中の基本の文献である『ズプハン版ヘルダー全集』の記載が見あたらないからである。そこに記載されているのは、Dobbek が 1957 年に刊行した五巻本の『作品集』と Stolpe が 1965 年に編纂・刊行した二巻本の『人類歴史哲学考』、Dobbek が 1959 年に編纂・刊行した一卷本の『書簡集』、1954 年に Harich が長大な序文を付して再刊したハイムの二巻本の『ヘルダー伝』、Schirmunski のロシア語のヘルダーの伝記を Stolpe が 1963 年にドイツ語に翻訳したもの、そして Dobbek が 1963 年に出版した『カロリーネ伝』だけである。

Dobbek に代表される東ドイツのヘルダー研究と並行して、1960 年代以降の西ドイツにおけるヘルダー研究も特に文献学に基礎を置く Irmscher の活動によって大きく進展する。ちなみに西ドイツでは 1967 年から 1968 年にかけて『ズプハン版全集』全 33 巻(1877-1913)のリプリント版が刊行され、ヘルダー研究も大きく促進されるようになった。他方また西側の英米圏や日本においてもこのリプリント版が輸入されるなどして、研究に大きく貢献した(このリプリントは 1994 年から 1995 年にも行われ、2007 年には全体がオンライン化されている)。

またリプリントという点では、ズプハン版と同じく 19 世紀後半以降のドイツにおける国民意識の盛り上がりの中で全 222 巻という規模で出版されたキュルシュナー編『ドイツ国民文学叢書』(Deutsche National -Literatur)が 1974 年に日本の三修社から再刊された。その中でヘルダーにはオイゲン・キューネマンが中心となって編集された全 10 巻が割り当てられている。これらによってヘルダーの著作の大部分がリプリントで読めるようになったのみならず、1954 年に再刊されたハイムの『ヘルダー伝』も併せるとヘルダー研究の幅は著しく広がったと言えよう。

次にこの時期において注目すべきは 1968 年にポーランドの研究者 Emil Adler によって刊行された研究書『ヘルダーとドイツ啓蒙主義』であろう。ポーランドではすでに 1820 年にヘルダーの『人類歴史哲学考』第四部第十六巻における「スラヴ諸民族」の章(拙訳『人

類歴史哲学考』(四)、217-222 頁)がポーランド語に翻訳されており、スラヴ語圏諸国の中でもヘルダーが積極的に受容されてきた歴史がある。ただ 400 頁に及ぶ Emil Adler の本書(ポーランド語原著の刊行は 1965 年)は受容史に特化しただけのものではなく、ヘルダーの生涯を追いながら、哲学、宗教、歴史を中心にヘルダーのフマニテート思想を考察するものである。なお Emil Adler は前出の Irmscher とヘルダーの『手書き遺稿目録』の編纂にも携わっている。

ドイツ文学関係の研究書では 1968 年に西ドイツで刊行された Dieter Lohmeier の”Herder und Klopstock. Herders Auseinandersetzung mit der Persönlichkeit und dem Werk Klopstocks”が重要である。というのも同書はヘルダー側の一次資料として「手書き遺稿」を使用しているからである。ゲーテの小説『若きヴェルターの悩み』(1774)におけるロッテの「クロプシュトック!」という言葉で有名な Klopstock (1724-1803)は、その詩作品によって若きヘルダーに大きな影響を与えたのみならず、両者の交流は互いの最晩年まで続いた。Lohmeier の同書は文学的側面からヘルダーがクロプシュトックの作品とどのような観点から取り組んだかということを一次資料に基づいて丁寧に検証している。

同じく 1968 年に西ドイツで Karl Otto Konrady 編による作品選集”Johann Gottfried Herder. Schriften”が出版されるが、解説や注釈は付されていない。この 250 頁ほどのrororoの新書判に収められた作品は次のとおりである。

『オシアンと古代の諸民族の歌謡についての往復書簡からの抜粋』(1773)(抜粋)

『シェイクスピア』(1773)

『人間性形成のための歴史哲学』(1774)

『人類歴史哲学考』(1784-91)(抜粋)

『フマニテート促進のための書簡集』(1793-97)(抜粋)

『イドゥナ、あるいは若返りのリンゴ』(1796)

1969 年には Wolf-Dietrich Rasch による作品選集”Der junge Herder”(第二版。初版は 1955 年)が刊行されるが、表題の示すとおり、若きヘルダーの次の作品がいずれも抜粋で収められている。

『1769 年の旅日記』(1769)

『未来のゲーニウス』(1769)

『私の人生の混乱した影の寓話』(1770)

『近代ドイツ文学についての断想集』(1767)

『トマス・アプトの著作について』(1768)

『オシアンと古代の諸民族の歌謡についての往復書簡からの抜粋』(1773)

『シェイクスピア』(1773)

『言語起源論』(1772)

『人間性形成のための歴史哲学』(1774)

Rasch によれば、ここに取り上げられた作品は主としてシュトルム・ウント・ドラング期の「言語、文学、歴史」に関するものであり、ビュッケブルク時代の神学作品は前面に出ていないとされる(同書、「後書き」127 頁)。Max Niemeyer Verlag のシリーズ”Deutsche Texte”の一冊として刊行された同書には注釈はまったく付されていない。

同じく 1969 年には前出の Alexander Gillies によって二冊のドイツ語テキスト版が出版されている。一つは『近代ドイツ文学についての断想集』(1767)の抜粋であり、もう一つは『1769 年の旅日記』である。前者には 20 頁ほどではあるが注釈が付されている。後者は 1947 年に刊行された版の第二版である。

書簡では東ドイツで 1959 年に Dobbek の手になる一卷本の選集が刊行されていたが、これは 1970 年に Regine Otto によって引き継がれている。この 500 頁を超える書簡選集には長短 170 通ほどの書簡と 120 頁にわたる注釈・人名索引・ヘルダーの作品一覧が付されている。書簡の選択にあたっては、同じ Aufbau-Verlag から Dobbek の編纂で 1957 年に刊行された五巻本の作品集に収録された作品の「成立と影響、そして内容の理解に寄与する」(同・選集、IX 頁)書簡が考慮されている。なおこの一卷本の書簡選集については 1977 年から刊行が始まった『ヘルダー書簡全集』の編纂成果を反映した改訂第二版が 1983 年に刊行されている。

ヘルダーの伝記という点では 1970 年に刊行された F. W. Kantzenbach による”Johann Gottfried Herder mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten”が貴重である。これは「ロ・ロ・ロ伝記叢書」の一冊として出版された 150 頁ほどの小著で、Haym や Clark の大著には及ばないものの、戦後の西ドイツで、偏りのないヘルダー像が提示されたことの意義は決して小さくないと思われる。ちなみに作成者が目にした版は、1996 年の第六版で、発行部数は 29,000 部となっている。

ドイツ語以外の言語で書かれた文献に目を向けると、英語による翻訳では 1968 年に Frank E. Manuel 編の”Herder: Reflections on the Philosophy of the History of Mankind”が

刊行されている。400 頁に及ぶ同・訳書は『人類歴史哲学考』の 1800 年に刊行された Churchill による英語完訳版の縮訳であるが、巻頭に 20 頁ほどの解説が付されており、長らく絶版状態にあった Churchill の訳書に代わって、英米圏の読者にこの作品を近づける役割は果たしたと思われる。

続いて英語では 1969 年と 1970 年に刊行された二つの書物が重要である。まず Mayo の『ヘルダーと比較文学の始まり』は、21 世紀になって新たに議論されるようになった「世界文学」との関連で興味を惹かれるが、Mayo の関心はヘルダーの『フマニテート促進のための書簡集』第七集と第八集（共に 1796）におけるヨーロッパの古典古代文学と近代文学の比較考察に向けられている。十七世紀末以来、フランスで盛んになった「新旧論争」を背景としたヘルダーの考察は、1795 年に出版されたゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に端を発する「ドイツ古典主義」と「ドイツ・ロマン派」による文学論争に、自らの文学観を対峙させたものである。

Mayo の著作に大きな影響を与えたのはチェコ系アメリカ人の文芸理論家で比較文学にも造詣が深かったルネ・ウェレックの業績、すなわちウォーレンとの共著『文学の理論』（1949）や『近代批評の歴史 1750-1950』全 8 巻（1955-1992）であったと考えられる。Mayo が主として取り上げるのは『近代ドイツ文学についての断想集』（1766-67）によってドイツの文壇に登場した文芸批評家としてのヘルダーであるが、それぞれの地域や時代の文学を人類史全体の中で考察するその視点は前述の『フマニテート促進のための書簡集』や最晩年の『アドラスデア』（1801-1803）まで一貫している。特に 1790 年代以降のヘルダーは、従来のドイツ文学史記述にあってはゲーテとシラー、あるいはノヴァーリスやフリードリヒ・シュレーゲルの陰に隠れてしまいがちであったが、その意味でこの時期のヘルダーに焦点をあてたことは高く評価されよう。

1970 年に出版された Nisbet の英語文献『ヘルダーと科学の哲学および歴史』は、ヘルダーの研究史において自然科学に特化した最初の研究書であると思われる、350 頁に及ぶ同書では、ヘルダー思想の根幹にある「力」（ちから Kraft）の概念をはじめ、「原型」（Typ）など、特に 1780 年代にゲーテの自然研究との関連の中で書かれた著作、すなわち『人類歴史哲学考』第一部（1784）や、スピノザ論でもある『神。いくつかの対話』（1787）を理解するうえで不可欠な概念や方法論、そして自然学（Physik）、生物学、生理学、人間学、心理学などの学問について広く考察している。

批判期以前の康德やゲーテがニュートンの力学や光学研究と積極的に取組んでいたことは周知の事実であり、研究や翻訳（たとえばゲーテの『色彩論』）もドイツ内外で進んでいる。一方でヘルダーについては旧来の哲学史記述にあってハーマンやヤコービと並んで「非合理主義」というレッテルを貼られ、およそ自然科学とは程遠い思想家と見なされてきた。また主著の『人類歴史哲学考』もその表題から、ヘーゲルの「歴史哲学」の系譜に属する書物と考えられがちであった。しかし『人類歴史哲学考』の第一部に少しでも目を通してみると、そこではハラーやヴォルフなどに代表される当時の最先端の自然諸学問が展開されている。Wolfgang Pross らによって『人類歴史哲学考』の学問史的研究が格段に進んだ現在においても Nisbet の書物は今もなお参照すべき文献であると思われる。

ドイツに戻ると、東ドイツでは 1971 年に Stolpe によって『フマニテート促進のための書簡集』（1793-97）のテキスト版が注釈付二巻本で刊行された。これは同じく Stolpe によって 1965 年に刊行された『人類歴史哲学考』（1784-91）の場合と同じく、作品全体に詳細な訳注が付された最初のドイツ語テキストであり、今もなお参照に値するものである。

同じ 1971 年に西ドイツでは Thomas Willi による研究書“Herders Beitrag zum Verstehen des Alten Testaments”が刊行されている。これはヘルダーと『旧約聖書』の関係を、ヘルダーを「文献学者」「歴史家」「神学者」と見立てたうえで、「『旧約聖書』の言語」「『旧約聖書』と歴史」「聖なる書物としての『旧約聖書』」という三つの観点から考察したものであり、専門的な神学研究の立場からのヘルダー研究として重要なものである。

さらに西ドイツではヘルダーが 1771 年から 76 年まで過ごしたビュッケブルクで、ヘルダーが同地に着任して 200 年目を記念したシンポジウムが開催され、これはベルリンの壁が崩壊する一年前の 1988 年まで、計五回にわたって続けられた（これについては前出の濱田真による「日本ヘルダー学会小史」1.「ヘルダー研究会」と「ビュッケブルクの集い」を参照）。このシンポジウムについては以下の五点の論文集が刊行されている。

1. J. G. Maltusch (Hg.): Bückeburger Gespräche über Johann Gottfried Herder 1971 (1973)
2. J. G. Maltusch (Hg.): Bückeburger Gespräche über Johann Gottfried Herder 1975 (1976)
3. J. G. Maltusch (Hg.): Bückeburger Gespräche über Johann Gottfried Herder 1979 (1980)

4. J. G. Maltusch (Hg.): Bückeburger Gespräche über Johann Gottfried Herder 1983
(1984)

5. B. Poschmann (Hg.): Bückeburger Gespräche über Johann Gottfried Herder 1988
(1989)

日本においてはヘルダーの主要著作の翻訳において非常に大きな進展が見られる。まず 1968 年に植田敏郎によって『神についての会話』(1787)が初めて日本語で読めるようになった。巻末には 20 頁にわたる訳注と、これも 20 頁にわたる論考「ヘルダーにおける＜力＞の概念」が解説に代えて収められている。「あとがき」で植田も書いているように、主著『人類歴史哲学考』第三部と同じく 1787 年に刊行されたこの作品は、「主著の哲学思想をいちばんよく示している。いってみれば主著を解明する鍵の一つである」(同・訳書 241 頁)とともに、「スピノザ論争」を理解するための基本文献の一つでもある。

1967 年と 1968 年には歴史家フリードリヒ・マイネッケの大著『歴史主義の成立』の翻訳(菊盛英夫・麻生健 訳)が上下二巻で刊行されている。上巻ではシャフツベリ、ライプニッツ、それからヴォルテール、モンテスキュー、ヒューム、ギボンなど十七世紀以降のイギリスやフランスにおける歴史的思考について考察される。下巻ではレッシングとヴィンケルマンから始まり、メーザー、ヘルダー、ゲーテ、そしてランケに至るまで、十八世紀から十九世紀初頭にかけてのドイツにおける歴史思想の展開が記述される。

下巻に収録された「第九章 ヘルダー」は翻訳で 100 頁近い分量があり、そこでは主としてヘルダーの二つの歴史哲学書、すなわち『人間性形成のための歴史哲学異説』(1774)と『人類歴史哲学考』(1784-91)が考察の対象となっており、その意味でも同書はヘルダーの歴史哲学を理解するための基本文献の一つである。特に『人間性形成のための歴史哲学異説』については「発展」(Entwicklung)と「個別性」(Individualität)という概念が重視され、各民族の「個別性」を把握するための「感情移入」(Einfühlung)という方法に着目している。

1972 年にはヘルダー思想の根幹を成す言語哲学の基本書で、この年に刊行 200 年を迎える『言語起源論』(1772)の日本語訳が期せずして二つ現れて注目を集めた。この二つには、それぞれ詳細な訳注と解説が付されており、日本のヘルダー研究にいっそうの厚みを加えた。ちなみに 1972 年には月刊誌『言語』(大修館書店)の刊行が始まり、ソシュールの『一般言語学講義』の翻訳が出版されるなど、言語学が一つの潮流となった時期でもある。

1975年には思想書シリーズ『世界の名著』（中央公論社）の一冊として『ヘルダー・ゲーテ』が出版され、既訳のある『シェイクスピア』と『人間性形成のための歴史哲学異説』に加えて新たに『彫塑』が訳出された。ヘルダーの感性論的認識の基盤を成す「触覚」が議論の中心に置かれた『彫塑』の訳出は、日本でのヘルダー研究に新たな視点を提供するものである。この『ヘルダー・ゲーテ』について強調すべきは、巻頭に編者の登張正実と小栗浩による70頁にわたる解説「ヘルダーとゲーテ ドイツ・フマニズムの一系譜」が置かれていることであろう。

「ヘルダーとゲーテ」という組合せは「カントとヘルダー」と同じくらいドイツの文学史や哲学史において重要なものであるが、従来「ヘルダーとゲーテ」は、もっぱら1770年の両者の出会いに始まる「シュトルム・ウント・ドラング」との関連から語られることが多かった。これに対してこの長大な解説では両者の生涯全体を視野に入れるとともに当時の文学や哲学の思潮にも目が向けられている。またヘルダーに関する記述では、和辻哲郎との関連にも言及されており、これも必読である。

同書に付された月報的小冊子「世界の名著〔続〕付録10」において、小栗は次のように述べ、さらなる翻訳や研究の必要性を訴えている。「訳者として言えば、ヘルダーについては、これから、翻訳なり研究がなされなければならない、そのほんの手始めという感じでね。文学畑の人はゲーテとの関連でしか述べないし、歴史関係の人でも『人類歴史哲学考』あたりで終わっちゃうもんだから、その間にあるもろもろが、だれも手をつけずに残っているわけです。思想家としては、ずいぶん面白い人だと思うね」（同、8頁）。いずれにせよ『世界の名著』に加えられることによって、ヘルダーが日本の読書界においてその存在を知られるようになったことは、日本のヘルダー受容史における重要な一歩であった。